



2020年（令和2年）7月9日 // 木曜日 // 第3号

プレジール通信

“プレジールのいま”を（不）定期的にお伝えします。



西陣織と牛革を合わせたバッグの制作例



職人による制作風景

得意とする事

時間のある「今」だからこそ、今回は改めてプレジールの「得意な事」や「ヒストリー」にスポットライトを当ててお伝えします。

一般的にあまり広く知られていないのですが、バッグ職人は大きく2つに分けられます。

- ①裂地を素材として扱う「裂地バッグ職人」と
- ②革を素材として扱う「革バッグ職人」です。

型紙の取り方、素材の扱い方、伸縮の有無、使用する道具等、様々な点で「違い」があり、「裂地バッグ職人」は裂地のみ、「革バッグ職人」は革素材のみを基本的に扱います。

帯地や着物地、織物などの「裂地」を素材としたハンドバッグは、和装に合わせ、牛革やラム革、豚革など「革」を素材としてハンドバッグは、洋装に合わせてお使い頂く事が多くなる事が特長です。

このセオリーに当てはまらないのが、喪服に合わせて使うブラックフォーマルバッグ。殺生を伴わない裂地素材を使用する事がマナーとされているためです。

プレジールでは、この「見えざる壁」を打破し、裂地素材と革素材を組み合わせたハンドバッグの制作が可能です。例えば帯地に牛革を合わせたハンドバッグを制作した場合、そのスタイルはボーダレスとなり、和装でも、洋装でもお使い頂きやすいスタイルに仕上がります。言わば、「日本ならではの」ハンドバッグをお愉しみ頂けます。

如何でしょうか、こんなボーダレスバッグ。きっと多くのお客様に喜んで頂けるはずです。

プレジール・ヒストリー

プレジールは、現社長（輝夫）の実父（保）が1966年（昭和41年）に創業しました。創業時の社名は「有限会社秀巧房」。保の実父（七三）は、江戸袋物職人。1938年に開かれたパリ万博で金牌を受賞したハンドバッグを手掛けたほか、煙草入れや煙管入れなどを手掛けていました。我が「梅澤家」は、代々、袋物に携わっています。

創業後の「秀巧房」は、東京・浅草橋に本社を構えていた日本最大級の和装小物問屋「中村清商店」の専属メーカーとなりました。弊社事務所の机の引き出しには、創業者・保が描いた和装バッグや口金バッグ、パーティーバッグ等のデザイン帳が残っています。なかでも、葬儀の際に使用する喪服用着物地の余り裂で作った「喪バッグ」や、現代では「利休（蓬萊）バッグ」と呼ばれているバッグは中村清商店で実際に商品化され、全国各地で販売されました。「喪バッグ（後のブラックフォーマルバッグ）」や「利休（蓬萊）バッグ」は、その後、多くの同業他社でも制作されるような大ヒット商品となり、今でも利休バッグは和装業界の定番的バッグに位置付けられています。ちなみに弊社製利休バッグの特長は持ち手の付け方が「三点留め」となっている点。手間の掛かる縫製方法ですが、ここが大きな特長です。

中村清商店がその歴史に幕を閉じた事をきっかけに、秀巧房はプレジールに社名を変更し、問屋を通さず、現在お取引をさせて頂いている各社様と同じく直接取引をさせて頂くようになりました。

このような変化の後にも、皇室方がお使いになれる和装バッグの制作は引き続き担当させて頂き、今なお、織物を素材に、着物をお召しになれる際にお使い頂く、抱えスタイルのハンドバッグを制作させて頂いています。

大変栄誉で、光栄な事であり、制作を担当させて頂く職人は、身を引き締めて制作に取り組んでいる事は間違いありません。宮内庁に直接ハンドバッグをお納めする訳ではありませんが、報道等を通じて皇室方に実際にお使い頂いているシーンを目にするにつけ、大変誇らしく思えるものです。

これは、「七三」から始まった縫製技術を代々継承し、きちんとしたモノづくりが続けられている証であると自負しています。

皇室方がお使いになれるバッグのようなスタイルでバッグをお作りする事も可能ですので、ご購入の際はどうぞお気軽にご相談下さい。